

村上 穰さん

7才で腎不全になり
医師を志し腎臓内科医に。
腎臓移植をしても
悩みは深くなるばかりだったのが
今、ようやく生きがいを見つけました



少しでも透析患者さんが移植を受けられる、
そういった世の中にしていきたい

腎臓内科医の村上穰さんは子供のころから腎臓が悪く、それがもつて36年間の人生で何度か挫折や葛藤に苦しめられました。5年前にお母さまから提供を受け腎臓移植を受けてからは、医師という仕事と自分の病気との葛藤はより強くなりました。それが「移植の啓発」という生きがいを見つけ、今までのさまざまな悩みとやっと折り合いをつけることができたといいます。今が人生でいちばん幸せという村上さんを、佐久総合病院にお訪ねして話を伺いました。

腎臓病だったから 医師を志しました

松村 長年腎臓が悪く、透析に入らず腎移植をなさったそうですね。

村上 はい、5年前に母から腎臓の提供を受け移植をしました。

腎臓が悪くなったのはいつからですか？

小学校2年生のときです。学校検診で尿に蛋白と鮮血がでていたといわれ、調べたら膀胱から腎臓に尿が逆流してしまう病気でした。逆流を止

める手術をしたんですが、そのときはもう腎臓の働きが半分くらいになっていました。それからずっと治療をしていらしたのですか？

はい、母が低たんぱく食を作ってくれました。

給食はどうしてたのですか？

毎日、お弁当を持っていきました。みんなが給食を食べてるのをうらやましいなあといつも思っていました。

お母さまも大変でしたね。

食事は家族とは別に用意してくれ、その頃は今のようレンジでチンできる低たんぱ

インタビュー 松村 満美子

く米はなかったので、家族用の大きな炊飯器とは別に私用の2合炊きの炊飯器があり、それでデンプン米を炊いてくれていました。肉も魚もほかの人より小さくて、いつも悲しかったのを覚えています。

そんな小さいときで、病気のことは理解できましたか？

まだ病気を理解することはできない年齢でしたから、給食が食べられない、体育を見学しなくてはいけない、学校が終わっても友達と遊べないというのは、子供心にかなり辛かったです。

腎臓内科医になったのは、やはりご自身が腎臓が悪かったからですか？

はい、この病気がなければ医師を志すことはなかったのではないかと思います。

患者さんの生活にあった医療を提供したい

実際に医師になる勉強をして、ご自分の病気についてなにか変わりましたか？

実は医学部に入りいろいろと勉強していくなかで、腎臓が悪くなるとどうなるかを知り、絶望して挫折しそうになりました。「将来、透析になる」というのはいわれていましたが、透析になるとどうなるかということ具体的に理解するようになり、「自分は長く生きられないのではないか、病気の体でこの仕事を続けられるのだろうか」と不安を感じずいぶん悩みました。それでも諦めなかったのはなぜですか？

半年くらい悩みましたが、そのときは時間が自然に解決していってくれました。

そうですか、それで腎臓内科医を目指したんですね。

いえ、最初は地域医療をや

りたいと思って、実績がある佐久総合病院で研修を受けたんです。

それはどうしてですか？

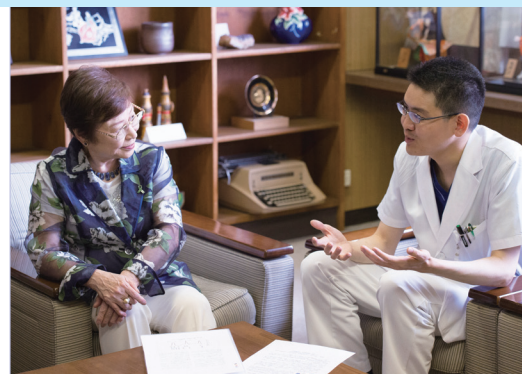
自分が悩んだ時期があったので、病気だけを診るような医者にはなりたくないと思ったんです。「検査結果がいいから順調です」というのはもちろん正しいのですが、それだけではなくて、患者さんの背景とか深いところを考えて医療ができる医師になりたいと思い、それなら地域の医療で患者さんの家を訪問して生活にあった医療を提供できる医師になろうと思いました。

それがいつから腎臓内科医に変わったんですか？

研修が終わり専攻を選ぶときに、やはり自分は腎臓が悪いので、地域医療もやりたいけど、腎臓内科だったら自分自身で分かっていることも多いと思い変更しました。

現在のように透析患者さんが増えると、地域医療と腎臓内科というのは随分リンクしますね。

そうなんです、たとえば高齢の方が腎臓が悪くなって入院したりすると、どうすれば自宅に帰れるか、透析のため



週3回通院してくるか、もしくは腹膜透析で暮らしていくか、やはり腎臓内科医の仕事だけでなく、患者さんが家に帰って今までと同じような生活を送れるようにするにはどうやって支援していくか、そういったところまでやっていく必要があるんです。

「移植の啓発」に立ち位置を見つける

最近「移植の啓発」について研究しておられるとか？

はい、私は移植をしたら腎機能も回復して、精神的にも元気になれると思っていましたけど、それがまったく違って、さまざまな葛藤に悩まされることになったんです。

それはどんなことですか？

ひとつは腎臓内科医でありながら、健康な母親から腎臓を提供してもらったということに対して、

お母さまを傷つけてね

はい、しかもドナーになってくれた母は腎臓がひとつになって慢性腎臓病になってしまったら、それならば自分が透析をして生活した方がいいのではないかと考えました。

村上 穰さん

1979年生まれ、36歳。7才で腎臓病保存期となり食事療法などの治療を開始。病気を持っていることから医師を志し、東京慈恵会医科大学を卒業、現在は佐久総合病院に腎臓内科医として勤務。医師であり患者であることでさまざまな葛藤に苦しむが、現在は腎不全患者だからできる「移植の啓発」活動に携わることで生きがいを見出す。2007年に結婚。2人の男の子の父親でもある。

それは難しい選択でしたね。
ほかの葛藤というのは？

移植したあとで腎臓内科医として患者さんを診ていると、移植をしたくても受けられないで透析をしている患者さんがむしろたくさんいるわけです。自分だけ移植を受けて元気になって、ほかの患者さんは一生懸命透析を受けているということで、とても後ろめたい気持ちになり、大きく落ち込んでしまいました。それは、お医者さまだからその悩みですね。どうやって立ち直ったんですか？

ゆっくり考える時間があると落ち込むので、忙しくして紛らわす、仕事に夢中になって打ち込むことによって、悩む時間をできるだけ短くするようにしました。

それで完全にふっきましたか？

いえ、実はそのあと大学院に入って臨床研究の勉強をしたのですが、そのときに薬害エイズの患者さんの講義を聴き、やはり患者さんの言葉にはすごく重みがある、違うなと感じたんですね。それからしばらく考えて、それだった

ら自分自身が腎不全の患者として、移植を受けた腎臓内科医として、何かできるのではないかと思い、大学院の研究テーマを「移植の啓発」に変えて修士論文を書きました。研究ではどのようなことをしているのですか？

現在は年に1回、母校の慈恵医大で臓器提供について考えてもらう講義をさせてもらっています。学生さんに協力してもらって、私の話を聞くことでどんな変化があったのかを研究しています。それは村上先生でなければできない研究ですね。それで結果はどうですか？

実はなかなか大変なんです。話を聞いて臓器提供の意思表示をしてくれたのは8%で、海外の研究では20%、30%は当たり前なんです。日本はなかなか難しいと思いました。そうですか、臓器提供の意思表示をしている人もやっと12%ですね。

そうなんです。それでも講義の感想に「私も意思表示をしました」と書いてあったりすると、話して良かったと感



じます。まだまだこれからですけれど、「移植の啓発」に自分自身が携わることで、私自身は生きがいを見つけたと思えるようになりました。

ご自分の立ち位置を見つけれられたんですね。

腎臓病だと分かった7歳のときから何度も精神的な壁に突き当たりました。それがようやく自分がやるべきことを見つけ、それによって救われたというか、これまでのすべてを受容することができ、今、一番幸せを感じています。ほかの腎臓内科医の先生ではできないことですものね。

はい、だからこそ、少しでも透析患者さんが移植を受けられる、そういった世の中にしていきたいという気持ちで取り組んでいます。

インタビューを終えて・・・・・・・・・・



とても7才から腎臓が悪く治療食で育った方とは思えないほど背が高く、お母さまの深い愛情を感じました。そのお母さまから腎臓をいただいたことで悩んだり、気づかったり、優しいお人柄がにじみでていました。今では腎不全患者である自分にしかできない活動をなさっていて、とても生き生きしてらっしゃいました。毎日の診療でもご自身の病気があるからこそ患者さんの心によりそって診ておられるのでしょう。患者であり医師である村上先生ならではの今後のご活躍を期待しています。